新・桃太郎

織田慶次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新・桃太郎

【Ｎコード】
Ｎ２２９８Ｎ

【作者名】
織田慶次

【あらすじ】
幼い頃に村が鬼に襲われた男の子がいた。
ある日、起きたら桃の中にいて、おばあちゃん達に拾われた。

前編（前書き）

桃太郎の二時創作です。子供が読む小説ではありません。

前編

僕には子供の頃の記憶が一つしかない、それも最悪なことを。
その頃の僕は病弱で親の農業の手伝いはできなかったが今で言う中学生くらいだった。その頃は家の中から親の仕事姿ばっかり眺める日々だった。その時もそうだった、暇と感じながらも親の仕事を見る事以外、何もしてなかった。
「う、うわー、鬼だー」
いきなりそんな叫びが村全体に響き回る。村にいる人々が同じ方向へと走って逃げている、みんなが逃げている方向と逆を見ると本当に鬼はいたその鬼は背丈は二メートルはあると思った、赤い肌に頭には角が二つ、その姿をした鬼が三人もいた。
その一人が急に走った、とても速い。そして子供が一人捕まった子供はすぐに子供の形はなくなった鬼が食い終わった後はもう骨と血の水たまりしかなかった。子供の叫び声は聞こえなかった、聞こえる前に死んでしまったと僕は考えた。見つかれば食われてしまう恐怖と親が大丈夫なのかの二つの気持ちがあった。
それから一時間辺り経って静けさが村に戻った、僕はその間、家の中でガタガタ震えながら終わるのを待っていた。
鬼がいないのを見て外に出た、しかしそこには人はいない。
そこにあるのは骨と血の水たまりだけだった。そしてその中から親達を見つけようとしていつしか疲れとこんな光景を見たためか気絶してしまった。

鬼が来た、僕の目の前で親しかった人、いつも頑張っていた人もみんな殺されて行く。そして僕の親にも・・・。
「やめろーーー！」

大声を出して僕は飛び起きた。
「おや、起きましたか」
知らないお爺さんが僕に優しく話かけてきた。
「あの、あなたは誰ですか？」
「私ですか。私は今日からあなたの世話をする、ただのジジィでございます。あなたはあの村でたった一人生きていたんですよ」
「えっ！僕以外みんな死んだのか？」
「いえ、分かりません。なんとか逃げた人もいるかもしれません」
「そんなのを信用して生き残りを探すなんてばかばかしいそれにもし見つかっても記憶がなかったらどうするんだ。でも僕にはあるあの忌まわしい記憶が頭からなくなってくれないんだ、忘れたいと思っても思い出してしまうんだよ」
僕はあの時を思い出し大声でいつしか話ていた。
お爺さんは何も言わずに僕の話を聞いてくれていた。
・・・数秒の沈黙が訪れた。
「そうかそうか。まぁ、落ち着くまでここに居ていいですよ。外にいきたければいけばいいさ」
そう言い残してお爺さんはいなくなった。
・・・・・・どうしようかこれから。外に行こう、気持ちが落ち着くかもしれないから。
そうと決めたらさっさと行こうどこでもいいから、お爺さんの所に行って、どこかに行くと伝えたら、お爺さんは振り向きもしないで「着替えはあっちだ」と、右に手を指すだけだった。
僕はそれにすぐに着替えて出かけることにした。
家を出てすぐに川を見つける事ができてそれを海に行くように歩く事にした。
川はどんどん広くなってゆくそして川の周りは草むらになっていた、僕は疲れたので草むらで休憩してたらいつの間にか眠ってしまったらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2298n/

新・桃太郎

2010年10月14日12時52分発行